

携帯電話利用とコミュニケーションの変容

——研究動向の批判的検討——

伊藤 耕太

ITO Kota

1 メディア研究の動向とその意味

1.1 財布、鍵、携帯

世紀の変わり目、携帯電話と PHS（以下、両者をあわせて「携帯電話」と表記）をあわせた移動電話の人口に対する普及率は 50.3% に達した（2001 年 1 月 12 日、朝日新聞朝刊）。単純計算で、国民の二人に一人が持っていることになる。ちなみにこの数字を諸外国とくらべてみると、日本での普及率が 41% だった 1999 年 9 月の時点で、世界での順位は第 14 位である（契約数は米国に次ぎ第 2 位）。第 1 位のフィンランド（普及率 64.9%）や第 5 位の香港（同 54.4%）とくらべて、現在の

50.3% で見てもまだ開きがある（図 1 参照）。したがってこのような数字だけで見ると、日本はとりたてて携帯電話が普及した社会だとは言えないかもしれない。しかし生活実感としては、「名実ともに必需品の仲間入りを果たし」（同記事）ていることも否めないだろう。

たとえば橋元良明らが 1999 年に行なったグループインタビューにおいて、ある 20 代男性は「出かけるときは財布、鍵、携帯というように 3 種の神器、なくてはならないものですね」「携帯を忘れてきた日は 1 日中落ち着かない状態で」と答えている（橋元ほか 2000：176）。またこのような感覚はジャーナリズムにおいてよりはっきりと

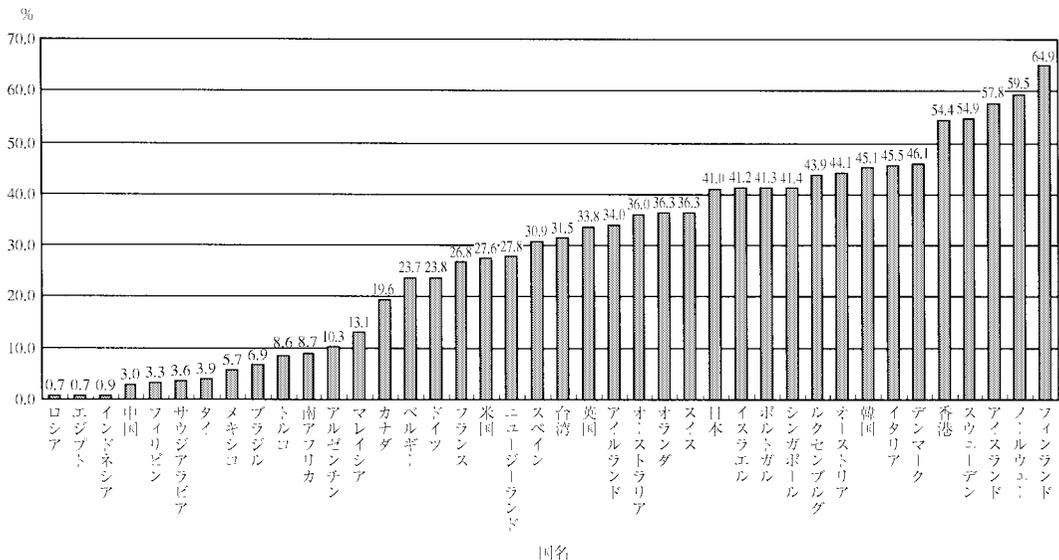


図 1 主要国・地域におけるモバイル通信の対人口普及率（1999 年 9 月現在）
出典：郵政省 2000：15

した描写として表われてくる。たとえば2000年11月18日付け日本経済新聞朝刊の「職員室」というコラムでは、登校途中に携帯電話を落とし、画面がひび割れてしまって「私もう生きていけない」と泣きべそをかく女子高生が紹介されている。これらのエピソードは、携帯電話利用者の多くが感じていることを程度の差こそあれ代弁しているものと言ってよいかもしれない。

1.2 携帯電話は何かを変えているのか

こうしたなか、携帯電話に対する公共的な関心も、ストラップや着信音などとの関わりでひとつの流行現象として扱ったものから、それがどのようにわたしたちの生活を変えた（あるいは変える）のか、といった点に移りつつあるようである。たとえば2000年8月31日付け朝日新聞夕刊では、「路上キス『携帯』感覚!？」と題し、「若者の意識と情報メディアの関連性」についての記事を掲載している。記事は「携帯電話をよく使う若者の方が、路上でのキスに抵抗が少ない」という兵庫県のある研究所によるアンケート結果とともに、「場所を問わずに相手と話せる携帯電話を使おうとする心理が、路上でのキスにそれほど抵抗を感じさせないのではないか」という分析を紹介している。また2000年12月23日付け朝日新聞朝刊は、高校二年生への普及率が58.7%に達したことが明らかになった総務庁（現・総務省）の「青少年と携帯電話等に関する調査研究」の結果発表¹⁾をもとに、携帯電話を持つことによって青少年の意識がどう変わったのか、ということに言及している。記事には「友達との仲が深まった」「不要な電話が増えた」「居所親にうそ」などの文字がおどる。また同日付け日刊スポーツでは「携帯持つと成績が下がり、万引きも？」と題し、携帯電話を持っている高校生の方が勉強時間が少なく万引きをしやすい、という総務庁の見方を紹介

している。

ここで注意しなければいけないのは、こうした言説の流布とともに、「携帯電話が〇〇（たとえば友人関係）を変える」といった命題が、何の検証もないまま常識化してしまうことである。またさらにそのことが、携帯電話の所持と、青少年の「問題行動」とのつながりを憂慮する議論²⁾を、極端に言えば「携帯電話が問題行動を助長する」といった方向へ押し流してしまう可能性がある。むしろ問題なのは、そのようにして「問題行動」の原因が携帯電話というひとつのメディア利用の問題のみに回収されてしまうことであろう。

1.3 技術決定論から社会構成主義へ

こうした言説は一種の技術決定論であると言える。技術やメディアというのは生得的に何らかの影響力を持っており、人々がひとつひとつそれを使えば、社会的な諸条件の如何に関わらずその影響力が発揮されることを自明視しているのである。1990年代以降の日本の社会学とその周辺におけるメディア研究では、こうした議論に対する批判的な見方を明確にした研究が行われている。ここで網羅的に紹介することはできないが、たとえば吉見俊哉や水越伸は電話やラジオなどの技術・メディアを歴史的な視点をもって研究することによって、それらの利用において自明視されている様態そのものが、様々な条件が重なった結果として社会的に構成されてきたものであることを明らかにしている（吉見ほか 1992；水越 1993；吉見 1995）。またこうした研究動向は西欧におけるそれとも連関しており、R. ウィリアムズによるテレビジョン研究（Williams [1975] 1990）やその後のカルチュラル・スタディーズ、C. S. フィッシャーによる電話の研究（Fischer 1992=2000）の視座が吉見や水越の研究にも受け継がれているようだ³⁾。

携帯電話などの移動体メディア利用に関する研究においてもこうした視座は継承されており、主に富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦・羽渕一代らの『移動体メディア研究会』が、質的調査をベースにした先駆的な研究を行っている。羽渕を除いた5人が執筆している『ポケベル・ケータイ主義!』（富田ほか 1997）やその後の研究でも、メディアに生得的な影響力を措定するような言説を批判する議論がなされている。こうしたスタンスは彼らにおいて十分意識的であり、それは岡田の次のようなことばに代表されていると言えよう。「メディアと社会のかかわりについて考察する際、メディアの影響を中心に据えた場合、技術決定論であるという批判を受けることになる。それゆえ、メディアの革新によって社会あるいは文化が一方的に影響を受けるのではなく、メディアというものの自体が社会的・文化的に構成された存在だということを踏まえた議論が必要とされるのである」（岡田 1998: 64）。すなわち、携帯電話などの新しいメディアが普及したとき、それが社会や若者のコミュニケーションを変容させるということがしばしば言われるが、そのメディアの性格そのものが実は社会的に構成されているということである。したがって社会やコミュニケーションの変容が起きたとしても、その要因を「メディア」や「若者」固有の問題として見ることは、必ずしも誤りではないにしても、注意深く検討しなければいけないことなのである。

1. 1と1. 2でいくつかの新聞記事を紹介したが、こうした議論もやはりいま述べたような視座から問い直されなければならない⁴⁾。だが同時に、われわれがいまとっている視座そのものの可能性と限界にも絶えず自覚的である必要がある。なぜなら、メディアが「社会的な生成物」（水越 1993: 14）であるとしても、それを構成する要素を解きほぐしていくことは簡単ではなく（岡田

2000: 28）、その解きほぐしが不十分だと、問題が「社会」というある種の一般性に回収されてしまいかねないからである。こうなってしまうのは、メディア独自の社会関係が見えなくなってしまう、真に批判的なメディア研究を行うことは難しくなる（阿部 1997: 45）。以下ではこうした問題意識のもと、携帯電話利用についての研究の主なトピックのひとつである、友人関係に関わる議論を整理し、その問題点を検討したうえで私なりの展望を示していこうと思う。

2 携帯電話利用とコミュニケーションの変容

2.1 「関係希薄化論」から「選択的關係論」へ

携帯電話利用と若者の友人関係に関しては、松田美佐による批判的な論文がある（松田 2000）。松田は、「広いが浅い、若者の友人関係」論の妥当性を検討しながら、「広いが浅い」のではなく「選択的」であるという見方を紹介し、「携帯電話を通じた若者の友人関係」は、「携帯電話」や「若者」という視座からだけではなく、『『日常的に接触可能な人口』の増加＝「都市化」という、より広い文脈に位置づけることが可能であるという仮説を提出している。

松田の説は、たとえば辻大介の議論によって傍証されている。辻は語用論から得られる知見をもとに、若者の「とか」「っていうか」などの言いまわしを考察しながら、「若者のあいまい表現の背後には、むしろこうしたメンタリティー——密着した人間関係に拘束されることを好まず、いつでも手軽に ON/OFF できる人間関係を好むようなメンタリティー——があるのではないか」と考える。そして、「人間関係の“浅い-深い”ではなくて“軽い-重い”という面についてのメンタリティーがむしろ関係しているのではないか」というように、人間関係を捉える軸が変化していること

を指摘し、「ケータイは若者にとって、まさに友人とのコミュニケーションのチャンネルを気軽に切り替えることのできる『リモコン』なのではないでしょうか」というように、携帯電話の「選択性」と「とか」「っていうか」弁をパラレルなものとして位置づけている(辻 1998)。辻によれば、こうした語による「言及」は「発話の妥当性主張を弱め、その立場に伴う責任を僅かなりとも回避する」機能を果たし、その結果として「自分が強い・濃い対人関係を指向する者ではないことを言外に聞き手に伝える」ことができるという。つまり「対人関係を結ぶ相手を選別するセンサーの役割を果たしている」のである。(辻 1996: 54)

そのようなコミュニケーション様態＝「選択的な人間関係」は、松田もメンバーのひとりである『移動体メディア研究会』によるいくつかの調査でも顕著に見られているという。固定電話・携帯電話については、常に留守録状態にしておき、残されるメッセージで相手を確認してから電話に出る／出ないを決める「居留守番型コミュニケーション」(富田 1997: 25) や、携帯電話については、ディスプレイに表示された電話番号(と、端末のメモリダイヤルとリンクして表示される「名前」)によって電話に出る／出ないを決める「番通選択」(岡田ほか 2000: 54-56) などが「選択的なコミュニケーション」として見いだせるという。松田はこうしたコミュニケーション様態を、「とか」「っていうか」弁などとある程度パラレルなものを見なしたうえで、その選択性が若者や携帯電話に固有のものではなく、より広い文脈から出てきているものであることを示唆する。そのより広い文脈というのが、上に述べたように都市化なのである。

2.2 都市化と選択の可能性

松田のこの議論が依拠しているのは、基本的に

は C. S. フィッシャーの次のような説である。フィッシャーによれば、「コミュニティが都市的になればなるほど、友人関係における選択の可能性は大きくなる」(Fischer [1976] 1984=1996: 194) という。というのも、D. サトルズや L. アランの言うように、隣人や親族や職場の同僚と違って、友人であることは生まれながらにして決めて決まっているわけでもなければ、外部から構造化されているわけでもなく、むしろ関わりのある人々によって自由に選択された地位だからである。松田はフィッシャーのこの説をもとに、それを継承する松本康による都市の定義——「日常的に接触可能な人口量」からの定義(松本 1992: 48)——を用いながら次のように結論付ける。すなわち、「若者の携帯電話利用から『選択的な友人関係』が見いだせることはむしろ『フィッシャー＝松本』仮説を裏付ける結果とみなすことができるのではないか」というのである。と同時に松田は、「携帯電話が増やす『日常的に接触可能な人』と都市的な環境がもたらす『日常的に接触可能な人』を同じ次元で扱うことが果たして適当であるのか」とも自問している。(松田 2000)

さて、以上のようにしてまとめられるこの議論において主要なポイントとなっているのは、以下の三つであると考えられる。

- 若者の友人関係が「広いが浅い」ように思えるのは、主に「年齢層効果による相違」⁵⁾について言及しているからである。
- 若者の友人関係は確かに変化してきているが、「希薄化」しているのではなく、「選択的」な関係になってきている。
- この「選択的」な関係は、「都市化」に起因している。

と同時に、この三点それぞれに、慎重に検討しな

ければならない課題が内包されていることに気が付く。

- ① 「年齢層効果による相違」を考慮したうえで、それでも残る違いとは何か。
- ② 「希薄化」と「選択的」な関係は、必ずしも排他的なものでないのではないか。
- ③ 都市に特徴的な「選択性」と、携帯電話利用に見られる「選択性」の内実は同じなのか。

そしてこの三点について詳述する前にまず検討しなければならないことが、松田の「都市化」説が、上野千鶴子による「選択縁」概念（上野 1994：281-301）の援用とともに提出されている点である。

上野によれば、従来の「血縁」「地縁」「社縁」が「選べない縁」であるのに対して、都市化社会が生み出した新しい人間関係である「選択縁」は「選べる縁」であるという。と同時に、「選択縁」は、すべての定型化された役割の集合の「残余カテゴリー」であり、「個人」を「役割の束」として考えたパーソンズとは逆に考えれば、近代的な「個人」とはこの残余カテゴリーに他ならない。したがって「選択縁」の社会こそ、個人に個人としてのアイデンティティを提供する基盤なのである。

2.3 選択性の内実を問う

上野自身はフィッシャーの議論に言及していないものの、人間関係の選択性を都市的なものと考えた点で、ほぼ同じ地平にある議論と考えてよいだろう。だが注意しなければいけないのは、上野の「選択縁」概念が、1960年代以降見られるようになってきた「女縁」——たとえば生協活動など、主婦層によるサークルやネットワーク——を

論じる文脈で出てきていることである。そこでは「選択縁」は、「居住地選択まで決定するような強い信頼関係」（上野 1994：288）として存在する。

一方、松田ら『移動体メディア研究会』が「選択的」なコミュニケーションを見出しているのは、繁華街の若者を対象にした調査においてである⁶⁾（松田ほか 1998：100-101）。すなわち、もともと注意しなければならないのは、上野の言う「選択縁」を取り結んでいる「主婦」などの層と、松田らの言う「選択的」コミュニケーションを行っている「若者」では、そのなかに置かれている社会関係が全く異なるということである。さらには、同じ「若者」でも、「大学生」と「高校生」や「中学生」では、彼ら・彼女らがそのなかに置かれる社会関係が大きく異なってくる。「クラス」がほとんど存在せず、カリキュラム制で講義を行う大学での人間関係は、上野の言う「選択縁」に比較的近いだろう。しかし、中学や高校では——さらには地元の公立か都心部の私立かによっても異なるが——歴然と「クラス」が存在しており、むしろ「社縁」に近い社会関係が日常生活の中心である⁷⁾。つまり、ひとくちに「若者」と言っても決して一枚岩ではなく、彼ら・彼女らをとりまく関係性は多様なのである。この点には十分注意を払っていく必要があるだろう。

また「若者」と「主婦」など、年齢層による携帯電話利用の違いに関しては松田自身も自ら注意を促しており、「若者の携帯電話利用」に関する調査で見られた「選択的な人間関係」が他の年齢層でも見られなければ、自身の「都市化」仮説はあてはまらない、と述べている（松田 2000）。しかしながら私がここで問題にしているのは、それとはまた別のことである。すなわち、上野の言う「選択縁」と、大学生や高校生の「選択的な人間関係」は、ことばのうえではどちらも「選択的」な関係ということになるだろうが、その内実は大

大きく異なっている可能性がある、ということである。なぜならば先にも触れたように、たとえば専業主婦と高校生では、それぞれが置かれている社会関係が大きく異なっているからである。したがって、たとえすべての年齢層に「選択的な人間関係」が見いだせたとしても、それはある意味で——都市化が人間関係の選択性を増大させるという意味で——当然であって、その「選択性」の内実を掘り下げていくことがより重要になってくる。またその「選択性」の内実を考える際にも、年齢層で輪切りにするのみでなく、各人が置かれている家族関係や社会関係、ライフステージなどから立体的に解釈していくことも必要であろう⁸⁾。前掲した問題点の③は、このような考察から導き出されるのである。この点の検討に関しては、私も調査を行っていく予定である。

2.4 都市、友人、選択性

また若干末なことではあるが、用語法に関わる次のような問題もある。現代の都市化社会において「友人」と言うとき、それは基本的に選択的なもののはずである。伝統的な共同体社会においては、たとえば地縁関係で結ばれた人間が「友人」でもある、ということがあろう。しかし都市化社会では地縁はむしろ希薄になり、「友人」とは、必ずしも物理的近接性に制限されるわけではない関係で結ばれた相手を指すようにもなる。こうした状況を上野は「選択縁」で概念化したわけだが、そのうえで「選択的な友人関係」と言うことは二重形容になりかねない。なぜなら、都市化社会において「友人」というとき、この概念には既に「選択的な関係であること」が与件として含まれているからである。

こうしたトートロジーに陥らないためには、やはり「都市化」説からある程度自由になったところで携帯電話利用における「友人」を見る必要が

あるだろう。松田は自らの説に対して、「携帯電話が増やす『日常的に接触可能な人』と都市的な環境がもたらす『日常的に接触可能な人』を同じ次元で扱うことが果たして適当であるのかについては、議論の余地がかなりある」(松田 2000)と問うているが、この問いは次のように言い換えることができる。すなわち、「携帯電話利用に見いだせる『選択的な人間関係』と、都市的な環境において生起する『選択的な人間関係』とは、同義なのだろうか」というようにである。たとえば松田らの『移動体メディア研究会』が繁華街の若者を対象に行った調査では、「親友の数は10人、友達の数はいくらもない」「携帯電話の番号を交換したら、それでもう友達」という答えが頻繁に見られたというが、こうしたことは、彼ら・彼女らにおいて「友人」を選択するときのやり方や基準が変わってきていることを示している。が、ここで言う「選択」を、フィッシャーが言ったような意味での「選択」と同じものであると言い切ることはいささか難しいように思われる。この様に問うとことばの問題になってきてしまうが、「選択」という語を都市化の文脈で使用するなら、いまあるようなコミュニケーションを捉えきれない、少なくとも理解しにくいように思われるのである。

2.5 「関係希薄化論」と「選択的關係論」の関係

さて、フィッシャーや松本によれば、都市化の進行と人間関係の選択可能性は相関している——「コミュニティが都市的になればなるほど、友人関係における選択の可能性は大きくなる」(Fischer [1976] 1984=1996: 194)——が、社会の都市化というのは何もここ最近のことではない。したがって彼らの説に基づくならば、少なくとも日本では戦後の都市化と平行して、友人関係に内在する選択性も徐々に増大してきているはずである。つまり「選択可能性の増大」とは、いわば都市化社会

における一種の通奏低音なのである。したがって松田の言う「選択的關係論」は、「関係希薄化論」に取って代わるものというよりも、もともとは都市化社会の基本的側面であると言えよう。

そうすると松田の主張は、辻の言うような脱近代的な新しいコミュニケーション様態のことを言っているのではなく、1960年代以降の都市化の延長線での議論になる可能性がある。要するにここでは、「関係希薄化論」と「選択的關係論」は、後者を主張することによって前者を排除できるというような、排他的関係にはないということになるのである。論理的にこのような結論が出てしまうのには、おそらく次のような構造的な原因があるであろう。つまり松田の議論においては、①携帯電話利用に見られるコミュニケーション様態が、②何人か論者の若者論を經由しつつも、③都市化から導かれる上野の「選択縁」概念を媒介として、④最終的にはフィッシャーや松本の都市論によって説明されているからである。先に述べたように、②から③へは「選択性」の内実において若干のズレがある。またフィッシャーや松本による都市の定義はあくまで「議論の出発点」(松本 1992: 48)であるべきであり、「帰結されるべき場所」ではない。当然その出発点から、都市が内包している多様な社会関係をメディア利用との関わりで論じていかなければならないのである。

問題①はこの意味で重要になってくる。ここでの「年齢層効果による相違」とはごく単純化して言えば、すでに若者ではなくなっている人が、加齢により変化したが、かつては自分たちも同じような意識や行動様式を示していたことに無自覚のまま、若者の友人関係を評するときに起こる錯覚である。橋元良明は「関係希薄化論」が評論されてやまない理由として、いくつかの理由とともにこのことを挙げているが、同時に、「確かに時代ともに変化したと見なしうる傾向がある」(橋元

1998: 126)とも指摘している。すなわち、しごく当然のことではあるが、すべての「変化したと思われるもの」が「年齢層効果による相違」に回収できるわけではない⁹⁾。また辻大介はいくつかの統計をもとに、若者の「対人関係・コミュニケーションそのものへの指向は相変わらず保たれて(むしろ数値上では強まってさえ)いる」と主張しながらも、同時に、対人関係そのものへ対する指向性とその対人関係の強さ・濃さに対する指向性との連関がねじれてきていることを示唆している(辻 1996: 47)。おそらく辻がこのように指摘していることが、「年齢層効果による相違」を考慮しても消失してしまわない変化であろう。辻はこの「ねじれ」を「若者語のポストモダニティ」として論じているが、今後はその「ポストモダニティ」の具体性を概念的なものとして問うていく必要があるように思われる。

2.6 一般性と個別性を架橋する

ところで橋元と辻は、ともにいくつかの定量調査をもとに単純な「関係希薄化論」を反証しているが、一方で佐藤俊樹はNHKの世論調査をもとに異なる結論を導き出している(佐藤 1992)。佐藤の分析では、80年代以降、対人関係の「ドライ化」が、世代ごと・調査年ごとに急速に進行しつつあることが示される。それは、日本的な「気持ちのわかりあい」という装置が機能不全になりつつあるからだという。すなわち、個人をひとつの社会関係に長期間閉じ込める権力工学が、構造的な限界にきたのである。佐藤はこのことを、移動性をめぐる権力工学への考察をもとに、歴史的・比較社会的に論じている。佐藤のこの議論は、本稿でのこれまでの議論にとってもきわめて示唆的であると思われる。というのも、ひとくちで都市と言っても、それが内包する社会関係は多様であり、さらにたとえば日本とアメリカの都市で

は、社会関係のあり方を支える原理そのものが異なることを示しているからである。また佐藤は、「気持ちのわかりあい」が機能不全になりつつある理由を、都市化ではなく、主に「豊かな社会」になったことに求めている。豊かな (affluent) 社会とは都市のことだと言えなくもないが、やはりそれ以上の説明を要するものである。今後この議論でも、携帯電話利用に見られるコミュニケーション様態を、都市というある種の一般性に帰着させるのみではなく、むしろわたしたちの社会の個性の問題としても捉え返していく必要があるのではないだろうか。

3 おわりに

以上、携帯電話利用に見られるコミュニケーションに関わる議論について、議論そのものの文脈性も示したうえで、その問題点を整理し、いくつかの問題提起を行ってきた。最後に若干ではあるが、この議論についての私なりの展望を示しておく。

本稿の議論から抽出できる課題は、大きく分けて三つであると思われる。まず、「選択的」コミュニケーションの内実とは何かということ、都市的な選択性からいったん自由になったところで考えていく必要があるだろう。次に、そうしたことにに関して調査を行う場合、被調査者がどんな家族関係・社会関係のなかに置かれているのかということに関しての奥行きをもった視点が不可欠であるということが挙げられる。携帯電話は日常の具体的な関係性のなかに深く埋め込まれているメディアだからである。最後に、それらの課題をクリアしたうえで、携帯電話利用に見られるコミュニケーション様態を、現代という社会の諸要素が交差するところで構成されているものとして概念化していく必要が挙げられるだろう。またこれらの課題以外にも、携帯電話利用の国際比較などが

不可欠であると思われる。なお本文では触れなかったが、最初の三つの課題については私も調査を継続中であるので、機会を改めて発表できればと考えている。

[注]

- 1) <http://www.somucho.go.jp/youth/keitai.htm> においてその報告書要旨を見ることができる(筆者は2001年2月9日アクセス)。なおこの要旨は調査の目的を、「青少年の非行防止、健全育成に向けた取組のための基礎的な資料得ること」としている。
- 2) たとえば茨城県教育委員会のホームページを参照。<http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/gakkou/mondai/koramu/koramu-1.htm> (筆者は2001年1月26日アクセス)
- 3) もちろんメディア研究全体がこのプロセスのなかに収斂しているわけではない。たとえばウィリアムズは1979年の著作においてM. マクルーハンの議論を技術決定論であると厳しく批判しているが、近年ではカナダのJ. バーランドが、自身の「カルチュラル・テクノロジー」という概念を用いながら両者を排他的なものではないと主張し、マクルーハンの再解釈を促しているという(栗谷2001; Berland 1992)。また日本では粉川哲夫が80年代から、既存メディアのオルタナティブな利用や新しいメディアの可能性について、一貫して批判的な評論活動・表現活動を行ってきた(粉川哲夫 1984)。アメリカではN. ポストマンが技術の影響に警鐘を鳴らすかたちで批判を行っている(Postman 1992=1994)。こうしたメインストリームに収まらない研究も視野に入れておきたい。
- 4) 一方で新聞やテレビなどの報道においては、話題が何であるかに関わらず、諸統計調査の結果出てきた相関関係が、容易に因果関係に身を代えて語られてしまう傾向がある。こうした傾向に対し、メディア研究に限らず社会学や諸学問がどう関与していくべきなのかは一考せねばならないだろう。
- 5) たとえば高年齢層から見て若者の行動・意識が自分たちと違うと感じられるものであっても、かつて自分たちが若者であったとき、やはり同じような行動・意識をもっていたとすれば、若者自体が変化したということにはならない。この場合、変化したというように思われるのは、時代の影響や

世代の影響ではなく、単なる年齢層効果による相違であるとされる。また橋元は、社会学者が若者を論じて時代の流れを分析しているように思えるもの（生きがいの喪失、ドライ、没イデオロギーなど）も、実はいつの世の若者にも当てはまることであり、常に存在する世代間格差への言及にすぎないと述べている。（橋元 1998：124）

- 6) この共著論文において「選択縁」は次のように言及されている（なおこの部分の執筆担当は松田ではなく藤本憲一）。

……目立ったのは、「番号通知サービス」の開始によって……番号非通知者からのコールを拒否したり、拒否しないまでも慎重な「心の準備」をしてから電話に出る行動様式が広まっていることだ。これは、番号をたよりに人間関係を峻別し、選択していくコミュニケーションの方向だといえよう。従来の地縁・血縁・社縁に代わる「選択縁」の存在は、かねてから指摘されてきたが、加算式の「ベル友」的關係性から加算乗除自在の「番通」的關係性への変遷は、移動体メディアの革新と表裏一体となった「選択縁」の成熟プロセスを示唆している。（松田ほか 1998：100-101）

この論文の参考文献には上野の著作は挙げられていないが、おそらく上野の言う「選択縁」のことと思われる。

- 7) たとえば私が現在行っているフィールドワークにおいても、京都市内の高校に通うある女子高生の場合、「友人」の数は、学校関係が約 60 人、塾な

どそれ以外が約 30 人の計約 90 人だったが、既知の友人からの着信を拒否した経験は全くなかった。また「若者」が誰を指すのかということの問題については松田も言及しているが、「若者の携帯電話利用」に見られる傾向は実際にも「若者」（松田が便宜的に定義するところによれば中学生から 30 歳前後）一般に見られる傾向だとし、中学や高校と大学での社会関係の違いはあまり問題にされていない。

- 8) このような主張に対しては「それで利用の仕方に違いが出てきたとして、単にサンプルのパーソナリティによるものではないか」という批判があるかもしれないが、むしろ私は、そのパーソナリティ自体に、社会関係のなかから構成されている部分があると考えたい。
- 9) たとえば桜井哲夫は 1980 年代の若者に特徴的なメンタリティを論じた著作の中で、「結局のところ、〈ことば〉を失った若者たちの存在は、世代対立の枠組みなどでは語れない大きな問題を提示しているのである」（桜井 1985：201）と述べ、年齢層効果による相違を超えたところにある変化の可能性を示唆している。桜井はこのことを量的調査で実証しているわけではないが、橋元も指摘するように、実際やるとなると難しい（橋元 1998：124）。また佐藤郁哉が言うように、量的調査と質的調査は単純な二項対立図式にはない（佐藤 1992：76）ということも考慮に入れつつ、生産的な議論を行なっていくべきである。

【参考文献】

- 阿部 潔, 1997, 「電子メディア／ネットワークを巡る言説のポリティックス—『テクノロジーによる呼びかけ』としてのネティズン」『関西大学総合情報学部紀要「情報研究」』第 7 号, 37-74.
- 栗谷佳司, 2001, 「トロントのメディア・スタディーズについて—カルチュラル・スタディーズとの関わりから」2001 年 1 月 28 日, マスコミ・フォーラム+社会情報学会合同研究会, 於・関西大学千里山キャンパス.
- Berland, Jody, 1992, "Angels Dancing: Cultural Technologies and the Production of Space," Lawrence Grossberg, Cary Nelson, Paula A. Treichler eds., *Cultural Studies*, New York: Routledge.
- Fischer, Claud S., [1976] 1984, *The Urban Experience*, 2nd ed., San Diego: Harcourt Brace Jovanovich. (=1996, 松本康・前田尚子訳, 『都市的体験—都市生活者の社会心理学』未来社.)
- 1992 *America Calling: A Social History of the Telephone to 1940*, Berkeley: University of California Press. (=2000, 吉見俊哉・松田美佐・片岡みい子訳, 『電話するアメリカ—テレフォンネットワークの社会史』NTT 出版.)
- 橋元良明, 1998, 「パーソナル・メディアとコミュニケーション行動—青少年にみる影響を中心に」竹内郁郎・児島和人・橋元良明編『メディア・コミュニケーション論』北樹出版, 117-138.
- 橋元良明・是永 論・石井健一・辻 大介・中村 功・森 康俊, 2000, 「携帯電話を中心とする通信メディア利用に関する調査研究」『東京大学社会情報研究所調査紀要』第 14 号, 83-192.
- 松田美佐・富田英典・藤本憲一・羽瀨一代・岡田朋之, 1998, 「移動体メディアの普及と変容」『東京大学社会情報研究所紀要』第 56 号, 89-108.

- 松田美佐, 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用—関係希薄化論から選択的關係論へ」(<http://www.3.justnet.ne.jp/~misam/youth-mobile.html>, 2000.7.18) (2000, 『社会情報学研究』 No. 4.)
- 松本 康, 1994, 「都市はなにを生みだすのか—アアバニズム理論の革新」森岡清志・松本 康編『都市社会学のフロンティア 2 生活・関係・文化』日本評論社, 33-68.
- 水越 伸, 1993, 『メディアの生成—アメリカ・ラジオの動態史』同文館.
- , 1996, 「ソシオ・メディア論の歴史的構図—情報技術・メディア・20世紀社会」水越伸編『20世紀のメディア 1 エレクトリック・メディアの近代』ジャストシステム, 5-25.
- 粉川哲夫, 1984, 『ニューメディアの逆説』晶文社.
- 岡田朋之, 1998, 「情報文化としての現代文化」井上俊編『新版現代文化を学ぶ人のために』世界思想社, 63-81.
- , 2000, 「移動体メディアと日常的コミュニケーションの変容」山崎正和・西垣 通編『文化としての IT 革命』晶文社, 16-29.
- 岡田朋之・松田美佐・羽瀬一代, 2000, 「携帯電話利用におけるメディア特性と対人関係—大学生を対象とした調査事例より」『平成 11 年度情報通信学会年報』43-60.
- Postman, Neil, 1992, *Technopoly: the surrender of culture to technology*, 1st ed, New York: Knopf. (=1994, GS 研究会訳, 『技術 VS 人間—ハイテク社会の危険』新樹社.)
- 桜井哲夫, 1985, 『ことばを失った若者たち』講談社.
- 佐藤郁哉, 1992, 『フィールドワーク—書を持って街へ出よう』新曜社.
- 佐藤俊樹, 1992, 「解体する日本のコミュニケーション—『気持ちのわかりあい』の生成から崩壊まで」アクロス編集室編『ポップ・コミュニケーション全書—カルトからカラオケまでニッポン「新」現象を解明する』PARCO 出版, 298-321.
- 富田英典, 1997, 「インティメイト・ストレンジャーの時代—ポケベル・ケータイで結ばれた『近しい他人たち』」富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦, 『ポケベル・ケータイ主義!』ジャストシステム, 14-30.
- 辻 大介, 1996, 「若者におけるコミュニケーション様式変化—若者語のポストモダニティ」『東京大学社会情報研究所紀要』第 51 号, 42-61.
- , 1998, 「ケータイと『とか』弁—いまどきの若者のコミュニケーションスタイル」(http://www.2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~tsujidai/paper/e_01/essay_01.htm, 2000.12.2) (=1998, 『学叢』62 号, 7-11. (日本大学文理学部)).
- 上野千鶴子, 1994, 『近代家族の成立と終焉』岩波書店.
- Williams, Raymond, [1975] 1990, *Television: Technology and Cultural Form*, 2nd ed, London: Routledge.
- 吉見俊哉・若林幹夫・水越 伸, 1992, 『メディアとしての電話』弘文堂.
- 吉見俊哉, 1995, 『声の資本主義—電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社.
- 郵政省, 2000, 『通信白書 (平成 12 年度版)』ぎょうせい.